凍てつく大地、解氷の大河、そして緑の大森林——
荒々しく、美しく息づく壮大な大自然と共に
生き、歩きつづける男〈デルス・ウザーラ〉！

巨匠黒澤 明がいま世に問う感動の叙事詩！

DERSU UZALA

A FILM BY AKIRA KUROSAWA

デルス・ウザーラ

〈カラー作品〉

製作■ニコライ・シゾフ／松江陽一　監督■黒澤 明　脚本■黒澤 明／ユーリー・ナギービン　撮影■中井朝一／ユーリー・ガントマン／フョードル・ドブロヌラボフ
美術■ユーリー・ラクシャ　音楽■イサク・シュワルツ　協力監督■野上照代／ウラジミール・ワシリーエフ　製作担当■カルレン・アガシャーノフ
ユーリー・サローミン　マキシム・ムンズク

ソビエト・モスフィルム作品　製作協力 41inc

Herald 日本ヘラルド映画配給

原作・河出書房新社／文庫本・角川書店

黒澤　明監督作品
〈カラー作品〉ソビエト・モスフィルム製作
製作協力 4l inc.　日本ヘラルド映画

DERSU UZALA
デルス・ウザーラ

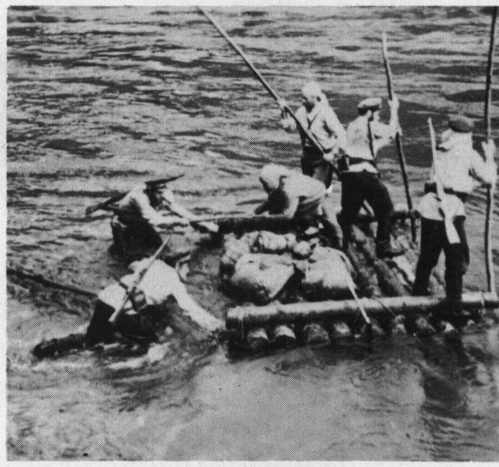
製作　ニコライ・シゾフ／松江陽一
監督　黒澤　明
脚本　黒澤　明／ユーリー・ナギービン
撮影　中井朝一／ユーリー・ガントマン／フョードル・ドブロヌラボフ
美術　ユーリー・ラクシャ
音楽　イサク・シュワルツ
協力監督　野上照代／ウラジミール・ワシリーエフ
製作担当　カルレン・アガジャーノフ
主演　ユーリー・サローミン／マキシム・ムンズク

■世界の″クロサワ″5年ぶりの超大作

「デルス・ウザーラ」は、黒澤明監督が三十年越しに念願していた企画だった。70年秋「どですかでん」が封切られて以来、多くのファンの熱望にもかかわらず″クロサワ″は沈黙した。「羅生門」、「生きる」、「七人の侍」、「用心棒」等、数々の傑作とともに世界的な名声を得たこの天才的映像作家の再起の原動力は、日本映画の現状に対する危機感と、やはり創造への若々しく限りない情熱だった。

しかもそれは、全く新しいかたちの、困難きわまりない冒険であり、賭けであった。きっかけは71年夏のモスクワ映画祭。この映画祭に招かれた黒澤監督に、ソ連映画界から申し出があった。「お好きな企画で一本、ソ連で映画を演出なさる気はありませんか」

まだ助監督時代に原作を読んで感動、いつの日か映画化したいと願っていたウラジミール・アルセーニェフの探検記「デルス・ウザーラ」のタイトルが、黒澤監督の口からでた。ソ連映画が誇る途方もない資金・物量と、天才監督の頭脳・技術のドッキングのはじまりであった。



■無限の大自然とちいさないのちの美しさ

二〇世紀のはじめ、隊員をひきいて当時未開の地だったシベリアのウスリー地方を数回にわたって探検したB・アルセーニェフは、そこで不思議な人間的魅力を持つ土地案内人と知りあった。

名前はデルス・ウザーラ。東洋系少数民族ゴリド人の猟師で、密林で生れ、密林とともに生きる身よりのない老人である。

デルスは、まさに大自然が生んだ妖精ともいえる男で、人を疑うことを知らない無垢な心と、鳥や獣や樹々や草花に対する深い愛情と理解の持主である。文明の地から来た近代人アルセーニェフは、デルスのなかに自然と見事にとけあって生きる人間像を見、その魂の美しさに深い感動をおぼえる。想像を絶するシベリア密林探検行の困難さのなかで、二人の男の友情は次第に強く、はなれがたい人間の絆をつくりあげてゆく……。

「火も水も、風も生きている」と、たどたどしい口調で話すデルスとアルセーニェフの一九〇二年秋の出会い。ハンカ湖付近で二人が道に迷い、凍死を逃れるために狂気のように草を刈って野営小屋をつくるエピソード。厳しい真冬に食料を失って飢えながら行進する隊員たち。一九〇七年のデルスとアルセーニェフの感動的な再会。急流をイカダで流されるデルスを、アルセーニェフ以下の隊員が救助するスリリングな事件。忍び寄る老いに視力をうばわれ、アンバ（ウスリー虎）の咆哮に死の恐怖を語るデルス。二人の都市への移住も、森で生れ森で育ったデルスの孤独は深まるばかりで、遂には最後の別れのときが待っていた……。

■一年の長期シベリアロケを乗りきって―

主役のマクシム・ムンズク（デルス）、ユーリー・サローミン（アルセーニェフ）をはじめとするキャスト、黒澤監督、中井朝一カメラマン、野上照代協力監督、松江陽一プロデューサー等の日本人スタッフ、ユーリー・ガントマン（撮）以下ソ連側スタッフ、撮影協力の兵士等総勢百八〇名の大ロケ隊は、沿海州アルセーニェフ市に基地を置いて、雄大な美しさと荒々しい厳しさをあわせもつ大自然に対峙して、一年間の苦闘を続けた。

うだるような高温と湿気に悩まされた夏、零下三七度という想像を絶した極寒に骨身をけずられた真冬の撮影。70ミリカメラ二台（予備三台）を直接の眼として、黒澤監督が切りとった自然の移りかわり、表情は、フィルムの長さにして七六〇〇〇メートル（富士山の高さの約二〇倍）。いわば、この映画の本当の主役といえる大自然のスペクタクルは、六チャンネルのステレオサウンドの迫力を得て、かってない″黒澤映像世界″を現出するだろう。